

中嶋嶺雄

Talk by Mineo Nakajima

なかじま みねお 一九三六年長野県松本市生まれ

国際社会学者、中央教育審議会委員

東京外国語大学中国科卒、東京大学大学院修了

東京外国語大学の学長を九五年九月より

今年八月まで務める。

この間、カリフォルニア大学官員教授などを歴任。

中国の文化大革命を

分析した「北京烈烈」でサントリー学芸賞を受賞。

他に「中ソ対立と現代」などの著書がある。

これまでの幕藩体制では対応できない。

芳賀 東京外国語大学は府中に移転されたんですね。

中嶋 はい、そうなんです。一度ぜひ来ていただきたいんですが、環境が最高にいいんですよ。

芳賀 駅から近いんですか。

中嶋 駅前です。扉も門もいっさいない。世界に開かれた大学というイメージをベースに、今までの日本の大学にまったくないキャンパスを作ったんです。僕はオーストラリアの大学に一年いたことがあるんですけど、むこうの大学は自然にうまく調和しているでしょう。アメリカのカリフォルニア大学サンディエゴ校もそんな感じでした。ね。芳賀 公園の中に大学がある感じ。

中嶋 国立大学というのはなんとなく「ダサイイメージがあるでしょう(笑)。せっかくの国有地を使って、まったく新しい設計ができるわけだから、新キャンパスは従来の古い大学のイメージを壊したかったです。できるだけ景観をいかして、壁もセピア色に統一したりしたんです。図書館も全部開架式で、市民の方にも自由に使えるようにした。とにかく新しいアイデアの大学ということが一番に考えました。

一方、教官のなかには「大学は孤高を保つべきだ」という考え方の人もいたりして、大変でした。先ほど申し上げたように、うちの大学はメインゲートもなく、どこからでも入れるよ

うにしたんです。そうしたら、バス会社「東京外国語大学正門」「裏門」とバス停の名前をつけたから、困ったことになってしまった。うちの大学には正門も裏門もない。どこからでもアクセスできるのがうちの大学だって説得して変えてもらいましたが、そんなことでも苦労しました。(笑)

芳賀 ああ、なるほど。僕が学長をしている京都造形芸術大学でも、今春「京都芸術劇場 春秋座」という歌舞伎劇場を作ったんですよ。大学のなかに本格的歌舞伎劇場をもつのは、初めての試みです。わが大学が掲げる旗じるし「京都文芸復興」「芸術立国」の拠点にしようと考えてね。

大学も戦後の新制大学になって、五十数年が経つわけで、過渡期に入っていますから、いつべんにいろいろ考えなくてはなりませんね。

中嶋 そうですね、本当に。

芳賀 今、日本は黒船来航を迎えているような感じでしょう。今までは自民党を中心とした幕藩体制でなんとかやってきたのが、僕はグローバルゼーションという言葉はあまり使いたくないけれど、そういう動きに日本という国



が対応できなくなってきた。幕末の時は、幕府諸藩も国難到来ということ、わずかに十五年くらいに間に、革命を起こしたでしょう。それに対して、今は革命を起こすだけのエネルギーが乏しくなってきたという感じですね。

それとおなじことが大学についても言えると思います。五十数年の間に体制がそれなりにできてきたけれど、今の時代、これだけ世界が平たくなり、お互いが見えなくなってきて、そこで競争しなければいけない状態になってくると、今までのようないわば幕藩体制ではとても対応できなくなってきたんですね。

中嶋 まさに、その幕藩体制から明治に移る、というたといえはじょうに分かりやすいですね。自分の大学を例にあげて申し訳ないんですけど、文部省ができたのが明治五年、そして東京外国語学校ができたのが明治六年なんです。私が学長になって、そういった大学の歴史の第一次資料を探して、『東京外国語大史』をようやく作つたんです。

安政四年の蕃書調所をルーツにしているんですが、同時に外務省に語学所という語学研修所があったんですね。

その二つと開成学校の語学部門が明治六年に合わさって東京外国語学校ができるんです。そういった日本の大学の流れをずっと見てくると、戦後五十数年における既存の秩序というのは、い

つてみれば護送船団なんです。

芳賀 まさにそうでした。

中嶋 東大、京大といった序列があるわけです。ところが現実的な話をする、学生は東京外語大のほうが、地方の旧帝大よりもはるかにレベルが高い。東大の文Ⅲと同じくらいのところ、受験の世界ではきているわけです。それにもかかわらず、依然として権威の序列が成り立っている。特に国立大学ですよ。国立大学というのは、本来ならば社会の変化に最も機敏に対応して、社会の変化を先取りすべきものでしょう。それがずつと逆で、いま一番遅れているのが国立大学。

芳賀 そうですね。

中嶋 だから、僕は昔から日本の大学は中国の国有企業と同じだと言っているんです。いかに改革しようとしても改革できない。そうかといって、僕は完全な民営化にはかなり疑問がありますけれど……。たとえば、うちの大学ではモンゴル語なんかもやっていて、あれを民間の大学でできるかというところが難しい。やつぱりそういうところは国が手当てしないとイケないと思えます。でも、それ以外の部分は、市場原理による競争を入れなければダメです。

大学を機能させるには学長のリーダーシップが必要。

芳賀 国立大学が一番対応が遅れてい

る。慶應とか早稲田とか立命館とかは私企業だから、一生懸命対応して、国立を抜いてるようなところがあるわけでしょう。

中嶋 早稲田は慶應に、ずいぶん差をつけられたと思うんです。だけど、その早稲田も、このところは真剣になって新しい大学を作ろうとしていますね。

芳賀 ところが、国立大学、とくに地方大学は異様に対応が鈍い。

中嶋 そこが一番問題ですね。

芳賀 六〇年代から、教授会の自己批判などがあって、それをきっかけに改革をやったつもりだったのに、結局何も変わらなかった。学部内のことで汲汲として、全体を見る余裕がまだにない。

中嶋 だからこそ、われわれ東京外語大も頑張って、大学連合なんかを創設しようとしているんです。一橋、東工大、医科歯科大、それぞれ学部が重複しない都内のユニークな大学がある種の連合を組めば、これはさっきの護送船団に対するひとつの存在になる。お互いに刺激しあうじゃないですか。

芳賀 護送船団に対して離列行動をやるわけね。

中嶋 そう。京大の総長もすごくよく評価してくれています。それはそれだけの価値があると思うんだけど、外から開かれた空気が入ってくることに對してはものすごい抵抗があるんですね。

芳賀 やはり外圧がないと動かない。京都でも昨年、地域内の五十の国公私立大が連合して大学コンソーシアムをつくり、駅前に大きいビルもできて、さかんに共同活動をはじめています。外語大が一橋や東工大などと連合するというのは、なにも単位互換なんていうことだけではないでしょう。

中嶋 もっと広くやろうとしたんです、編入学とかね。

芳賀 そうなると、これからは学長の独断専行とは言わないまでも、一種の寡頭政治をやつていかなないと、大学は機能的に動かないね。

中嶋 今の小さな学部自治を中心として、その小さな既得権の奪い合いで窮乏として、社会から孤立しては存続できないはずなんですけど、その危機感がどうもないんですよ。

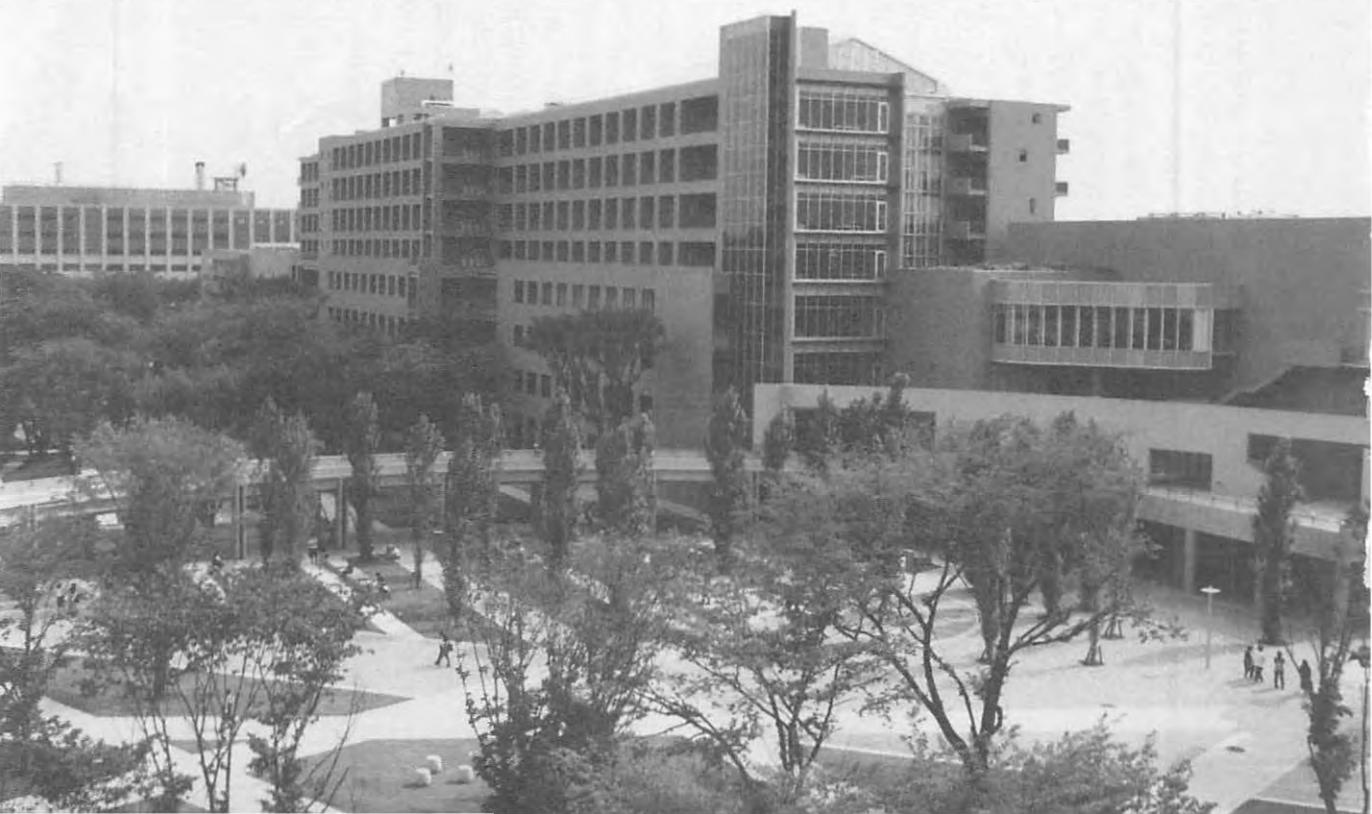
芳賀 それはないだろうな。なんといつたって、国立大学は国からお金が来るわけだし。学生募集のパンフレットなんか見せなくたって、学生は集まってくるからね。

中嶋 だいたい都内の国立大学はそうですね。

芳賀 僕なんて学生募集となると、京都の高校の進路指導の先生に会いに行ったり、名古屋の予備校にまで行ったりしますよ。「われわれの大学では、美術から演劇、歴史からデザイン、造園まで、実に面白いことを盛りだくさん



上・下ともに東京外国語大学府中キャンパス
広大な敷地に、中嶋氏が唱える
「開かれた大学」が実現されている。





京都造形芸術大学「京都芸術劇場 春秋座」。同大学副学長である歌舞伎俳優市川猿之助氏が芸術監督として、コンセプトを立案。現代演劇にも対応し、950人を収容できる

教育公務員特例法

第二章 任免、懲戒及び服務

第一節 大学の学長、教員及び部局長

(兼任及び免職)

第六条① 学長、教員及び部局長は、大学管理機関の審査の結果によるものでなければ、その意に反して免職されることはない。教員の降任についても、また同様とする。

立大学ではなかなか難しいんですよ。芳賀 そうでしょうね。でもそのかわり、私学はすぐ追いかけてくるのがいるからね。柳の下の二匹目のドジョウを狙って。(笑)

大学の教員が、最低限やらなくてはならないこと。

中嶋 でも、やり方によっては、やりがいがあるでしょう。

芳賀 それはあるね。たとえば通信教育ではスクーリングをやるけれども、すぐにその場で教師が学生に評価されるんです。あの先生は同じことを繰り返していったとか、声が聞こえなかったとか、話の筋が通っていないとかね。中嶋 いわゆる、スチューデント・エバリエーションですね。

芳賀 ええ。すぐにEメールが来るんです。大学の事務所に。もう教師は戦々恐々。もう準備に準備をして、確実に熱をこめてやらないと厳しい評価を下されてしまう。だって、通信教育のほうが、十代から七十代まで学生の幅が

地図を描くわけですから。これは、国

広い。中心は家庭の主婦だったり、定年退職したけれども、これからは趣味の油絵をずっとやりたいとか、建築をやってみたいとかいう人たちがなってます。中嶋 ああ、いいですね。この高齢化社会にびったりだ。

芳賀 だから、ひじょうに目が肥えていて、一般の学生に比べるとうう大変です。これを始めたのが、大学のためにひじょうにいい刺激になったし、大学が本当に社会に対して開かれるきっかけにもなった。

中嶋 私のところにも、学生や父兄からしよっちゅうメールや手紙が来んです。それを見ると、いかに学生の目が厳しいかよく分かる。いろいろな教師がいますけれど、特に人文・社会系は実験がないからさぼろうと思えばいくらでもさぼれる。大学があまり管理運営体制をがたがたやるのは本当はよくないと思うけれど、最低限度の約束事はやらなければいけない。それはゼミをきちんとやる。学生を可愛がる。授業をきちんとやるということは最低限の約束事です。

今の国立大学には教育公務員特例法というのがある。教員が厚く保護されているわけです。これを読むと、国立大学の教員は国家公務員としての制約もあるけれど、この法律によっていかに過保護かがよく分かりますよ。よほどの破廉恥罪でもやるか、犯罪を犯

さないかぎり、絶対に首にならない。

だから今度、独立行政法人化で大学が法人格をもつ時に、教授法は悪法だから廃止してほしい。フアシズムの時代じゃないんだから。

芳賀 なにがなんでも大学の自由だけを守らなければいけないような時代じゃないですよ。

中嶋 そう。ないんですよ。

芳賀 まあ、とにかく、サバイバル競争が厳しいですからね。特に、夏休み前が大事なんです。夏休みに学生たちが自分の故郷に帰るでしょう。それで、高校時代の仲間や後輩と会ったりする。そこであそこの学校はダメだとか、そういう噂が広まったらもう致命的なんです。あそこの大学は行ってみたら面白かったぞと、言われるようにならないといけない。それと芸術大学のための予備校があって、そういうところの評判がまたひじょうに大事なんです。次の年にきちんといい学生が教多く受験してくれるかどうかにかかっている。今、われわれの大学はいろいろ動いて、世評もだんだん高くなり、大小の劇場を作り、積極的行動に出て、ウワーツと燃えている時に、実際の授業の現場で手抜きがあったり、ほったらかしがあつたりすると、堤防に穴があいてしまうから。そのところには気をつけていますね。

中嶋 だから、そういうやる気のある

私学はきちんと頑張してほしいですよ。国立大学だってこれから大変です。定員が埋まらない大学だってありますしね。

芳賀 まあ、東京にある外語大や東工大はまだまだ安泰だけれど、地方大学は大変ですよ。

中嶋 大変ですよ。だから地方の大学はもっと個性化を進めるための努力をすればいいんです。信州大は「山岳科学」を始めますよ。

1-Tの時代だからこそよりいっそうの教養教育が必要。芳賀 あと、やはり教養教育がひじょうに大事ですよ。今の学生は歴史や文学や芸術についてはほんとに知識がないしね。豊かな知識を経験と連想でつないで生きてくのが教養なんだから。教養学部が残っているのは、東大と、あと少しくらいでしょう。

中嶋 今の学生たちを見てみると、ちょうど1-T革命に逆比例するような私たちで教養がなくなっているわけですよ。芳賀 なるほどね。

中嶋 今、大学でやらなければいけないことはコンピュータを揃えること。これを揃えてなかったら学生は来ない。だから、それはとても大事なことです。でも、果たして1-Tだけで二十世紀はあるかというとな、そうじゃ

ない。

芳賀 中身がないとね。

中嶋 やはり、もういっぺん私たちが古典を読ませないといけない。僕も新渡戸稲造の『武士道』を毎日一章ずつでもいいから読めと、若い人についているんですよ。

芳賀 まあ、大学四年間はたっぷり広い教養をやればいいんです。もちろん外国語学習もふくめてね。

中嶋 日本全体が、この失われた十年の後に何ができるかというのを、本当に死にものぐるいで考えて、教育再建をしなければいけないですね。

芳賀 そう、1-T革命とか言うからこそ、大学はいっそう教養教育をしつかりしなければ、とても国際人にはなれないし、日本人にもなれないですよ。自分が好きなのかさえわからないでいる。夏目漱石もルソーもなんとなく聞いたことがある程度。鎌倉時代の後に平安時代が来たと思っている学生なんていっぱいいる。彼らにちゃんと基本的な知識を教え込み、それをつなげて視野を展開する技術を教え込み、日本文化というものはこういうものであって、歴史にはこういう面白い人物がいて、こういう豊かな成果があつて、それは世界的な値打ちがあるものだということまで説いていく。それを伝えていくのがわれわれの大切な仕事であり責任ですよ。●

東京人

10

October 2001
no.171

contents



表紙イラストレーション・矢吹申彦
目次写真 上・立花隆氏
左・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館
下・東京商船大学百周年記念資料館



新教養主義の時代、大学は何ができるか

24 特集

大学が変わる

都心キャンパス新景観 写真・鈴木理策

慶應義塾大学三田キャンパス/法政大学ボアソナータワー/
上智大学四谷キャンパス/早稲田大学西早稲田キャンパス/明治大学リビティタワー

28 ゾマホン・ルフィン 上智大学大学院生 僕が日本で勉強する理由

32 高泉淳子 早稲田大学社会科学部卒業 自分を見つめる貴重な4年間

34 目黒考二 明治大学文学部卒業 寄付する前に出来てしまったのか!

座談会 36 お笑い、早慶戦 そのまんま東×浅草キッド
社会人学生ノススメ

42 大学に眠るお宝拝見 文・持田鋼一郎 写真・川島保彦

東京大学総合研究博物館/早稲田大学坪内博士記念演劇博物館/
明治大学考古学博物館/東京商船大学百周年記念資料館

インタビュー

52 立花 隆 教養再構築のために
「旧制高校」の復活を

対談 58 大競争時代に入った大学経営
中嶋嶺雄×芳賀 徹

64 学生街の食べもの屋今昔 文・重金敦之

68 学生スポーツの華 箱根駅伝物語 文・松尾秀助

73 フリーター200万人時代の就職事情 文・内田通夫

78 慶應大学SFC 湘南藤沢キャンパス が日本の
教育界にもたらしたもの 文・武田徹



photographs : Yasuhiko Kawashima